

高画質の追求は不変 IP強化とアナログの進化へ パナソニックのグローバル戦略

第2世代のi-proメガシステムが昨春世界同時投入され、その販売も好調に推移しているという。
アナログからIPまで、世界を舞台にダイナミックに活動するパナソニック。
本稿では、新年の初頭にあたって同社のグローバル戦略にスポットを当て、
海外営業グループグループマネージャー 野上淳司氏に取材した。

大川鮎太郎

新興国地域が成長を牽引

昨年、新生パナソニック株式会社として新たな歩みを始めた同社。2008年は、過去堅調だった国内市場や欧米市場で全世界的な経済不況を受けてやや成長鈍化が見られるものの、中国、アジア、中東などの新興国地域でアナログを中心に2桁成長を達成。

アナログでは、主力技術商品であるスーパーダイナミックシリーズのカメラが累計200万台を突破。さらにIPカメラやネットワークディスクレコーダー、マネージメントソフトウェアなどのIP商材も200%以上の伸びを示し、事業の成長エンジンとなった。

また、昨年春に世界同時投入されたメガピクセルカメラ i-proシリーズ第2世代の販売も順調で、「単に売り上げという数字以上に、メガピクセル高画質がもたらすIPの飛躍的認識力の向上を世界中にアピールすることに大きく貢献してくれた」と野上氏は語った。

グローバルな市場を見据えて

スーパーダイナミックシリーズの1号機は1998年に発売され、2008年度に累計200万台を突破した。現在は2010年までの3年間で300万台の達成を目指すネクスト・3ミリオン・アチーブメントを推進中という。野上氏も「監視カメラは画質が

命。その画質の良さと、条件を問わない自然なダイナミックレンジの拡大などの高い技術力が世界中で受け入れられたことがミリオンセラー達成の原動力になった」と成功の要因を語った。

さて、パナソニックのように市場が世界中となると、その対応も大変だ。監視カメラの世界ブランドとして「売りたい商品」と各国地域が「求める商品」が必ずしも一致するとは限らない。野上氏が「ユーザーニーズをしっかりと把握し、各国地域が求める商品を提供していくのがパナソニックの使命と考えている」と語ったように、先進国、新興国、途上国それぞれにマッチした対応が必要とさ



野上 淳司氏

パナソニックセキュリティビジネスユニット
海外営業グループ グループマネージャー

混在する場合、両者を満足させるクリアな映像を得るのは困難だった。

この問題を独自のCCDとDSPで解決したのがスーパーダイナミックで、これまでパナソニックでは従来比128倍のダイナミックレンジを実現していた。今回投入されるのは、この第5世代ということになる。アナログカメラでありながらインテリジェンス機能を付加されることが予定されており、どんなスペックになるか期待される。国内、海外のミドルエンド市場に大きなインパクトを与えることだろう。

i-pro高画質メガシステム

高画質化の追求はパナソニックの不変のコンセプトであるが、この高画質化をIPで飛躍させるために、昨春投入されたのが「i-pro高画質メガシステム」である。

1.3メガピクセルの高画質ネットワークカメラ(ボックス型、ドーム型)、多入力対応と長時間・高画質記録を実現するデジタルディスクレコーダ、高精細画像とライブ監視に対応するネットワークビデオデコーダを中核として構成され、映像を16:9のハイビジョンモニタにデジタル出力が可能。まさに目を見張る高画質と多彩な機能により、クオリティの高いデジタルIPソリューションを提供するという。メガピクセル高画質を世界中に広げる切り札とも言える戦略商品であり、販売も好調のようだ。

れる。

来年度にかけ、先進国のハイエンド市場には前述した「i-proシリーズ」のH.264化で一層の強化を行い、先進国・新興国のミドルエンド市場に対してはアナログカメラにインテリジェンス機能を付加した「SD(スーパーダイナミック)5」を投入予定。さらに新興国・途上国などのローエンド市場に対しては、エントリーモデルとして「小型ドームカメラ」の投入を予定しているという。

国内では、セキュリティ意識が暮らしと社会のあらゆる分野に浸透し、ハイエンド市場、ミドルエンド市場ともに、まだまだ成長が期待されている。政府関連、金融機関、

パーラー、大手企業、ビルなどが大きな顧客として考えられている。

また、海外では政府関連、金融機関、学校、大型スタジアム、展示会場、カジノなどが挙げられるが、近年、学校市場の需要が増えているという。これは多発する学校内でのトラブルの事後検証資料としてのニーズで、米国を中心に大きな成長が見込まれると言う。

スーパーダイナミック第5世代

パナソニックの高画質追求の歴史を語る上で欠くことができないのが「スーパーダイナミック」という技術だ。従来カメラでは撮影範囲内に著しく明るいエリアと暗いエリアが



ONVIFで標準化を加速

昨年12月、米国・ワシントンで、ネットワークビデオ機器間の国際標準インターフェースの策定やその普及を促進することを目的としたONVIF(オープンネットワークビデオインターフェースフォーラム)の第1回フォーラムが開催された。会議では、ビデオ機器間の通信フォーマットを標準化し、異なるビデオ機器間での互換性を確保する。その上で、フォーマットはすべての企業や団体が使用することが可能であることが確認された。

パナソニックはこの第1回フォーラムに参加し、国際標準インターフェースの策定・普及に努力することを表明した。野上氏も「この標準化がすべての人にとって大きな利益となることを期待している」として、業界を牽引していく姿勢を示した。

パートナーとの連携

また、標準化の一方で、パートナー対策も重要な課題だ。パナソニックのセキュリティ製品をサポートし、また統合ソリューションの開発を利用するためのソフトウェアメーカーやシステムインテグレーターとのパートナーシッププログラム・PSDN(パナソニックソリューションデベロップメントネットワーク)活動を欧米で発足させてから3年が経過した。いよいよ今年から国内での導入も予定され、パートナーやメンバー企業に対する技術支援やマーケティング支援を意欲的に行う

方針だ。

さらに、新規販売チャンネル開拓のため、IPCR(アイプロサーティファイドリセラー/IP販売認定店制度)活動も積極的に推進中。市場のメガ化、IP化に備えているという。

世界に向けた生産拠点

また、すでに稼働している中国工場・PSSZ蘇州松下系統科技有限公司の生産能力を2倍に拡大。アジア地域はもちろん世界市場への十分な供給体制の整備も終え、市場デマンドに応じたタイムリーな生産、出荷が可能になった。グローバル全体でのIP強化、アナログの安定供給に大きな力を発揮するものと期待される。

高圧縮技術とインテリジェンス

現在市場はアナログからIPへの過渡期にある。特に欧米では早くからIP化の流れが加速しているが、ユーザーのネットワークインフラの関係等で、まだまだアナログに対する需要も多いのが実情である。このあたりの事情は日本も同様で、IPカメラの普及率は20%程度。しかしながら、国内市場でのIPは200%以上の伸びを示しており、IPの統合力、効率性、接続性の良きなどが広く認識され、関心もニーズも非常に高まっていることも事実である。

今後は、H.264などの高圧縮技術を用いたメガピクセルカメラとそれを支えるパナソニック独自の要素技術(いわゆるブラックボックステクノロジー)を駆使してIPを強化すると

もに、アナログカメラも、前述した第5世代スーパーダイナミックにインテリジェンス機能を付加しさらなる進化を図っていく。そして、IP・アナログの両輪でグローバルな顧客ニーズに対応していく方針だ。

また、現在、次世代カメラシステムの将来構想としてインテリジェンス機能の基礎開発研究に意欲的に取り組んでおり、実際に商品としても、エンコーダーや屋外コンビネーションカメラに、置き去り/持ち去り検知、自動追尾等のインテリジェンス機能を搭載し始めている。近い将来、危険人物の特定や事前検知、自動通知などの新しいインテリジェンス機能が開発され、監視業務の効率化・自動化に大きく貢献することが期待される。

「インテリジェンスは機能を標準化したり、条件の異なる現場で精度を保つことが非常に難しい、しかし挑戦のし甲斐があり、実現すれば監視業務にとって大きな飛躍になる」と野上氏は締めくくった。

パナソニックのこの大きなチャレンジに期待したい。